

否定の応答付加表現について —「違う」を中心に—

佐 野 由 紀 子

On the Expression of Negative Response “*chigau*”

Yukiko SANO

0. はじめに

日本語において否定の応答を行う際に、「違う」「そんなことはない」「そうじゃない」などの表現が用いられることがある。これらは、「いや」「ううん」「いいえ」などの応答詞に続けて用いられることもあるし、単独で用いられることもある。

- (1) 「何さらすんや、ねえちゃん。あぶないやんけ。何やお前ふうちゃんじゃろが」「違います。」
私は一寸エンジンを止めて貰おうと思っただけで」(黒い)
- (2) 「あのチャッカー船でしょうか」と僕は、川下に見える船を指差した。
「いや、違います。あれは水船になっています。草津の船は二噸半の和船です。求心丸という船名です。しかし、いっぱい食わされたかな」と云って、能島さんはてくてく歩きだした。
(黒い)
- (3) 「みんな言いわけさ。それからみたら、君、ほんとに男らしくて強いと、オレは思うね」「そんなことはないです」(太郎)
- (4) 「あなたは、植物に詳しいのね」シスターは言った。
「いいえ、そんなことはないんです。友達のうちにあって、その家へ遊びに行く度に、葉を摘んでは、母のところへ持って行ってたもので、この木だけ知ってるんです」(太郎)
- (5) さとみ「私たちって似てるかも」／永尾「じゃ、似てる同士付き合おっか？」／さとみ「え」／永尾「あいいや、そうじゃなくて、じゃなくて、そうじゃないこともなくて」／さとみ「——」／永尾「——俺と付き合ってくれないかな？」(東京)

本稿では、森山(1993)に従いこれらを否定の応答付加表現と呼び、このうち特に「違う」について考察を行う。否定の応答付加表現の使用条件はそれぞれ異なり、互いに置き換えられない場合が多い。

- (1) 「何さらすんや、ねえちゃん。あぶないやんけ。何やお前ふうちゃんじゃろが」
「{*そんなことはありません／*そうじゃありません}。私は一寸エンジンを止めて貰おうと思っただけで」
- (3) 「みんな言いわけさ。それからみたら、君、ほんとに男らしくて強いと、オレは思うね」「{*違います／*そうじゃありません}」
- (5) さとみ「私たちって似てるかも」／永尾「じゃ、似てる同士付き合おっか？」／さとみ「え」／永尾「あいいや、{*違って／*そんなことはなくて}、じゃなくて、そうじゃないこともなくて」／さとみ「——」／永尾「——俺と付き合ってくれないかな？」

「違う」「そんなことはない」の違いについては、従来、先行文の述語の品詞の違いである、すなわち、先行する文が名詞述語文となる場合には「違う」が用いられるのに対し、先行する文が形容詞述語文となる場合には「そんなことはない」が用いられる、ということが指摘されてきた。

これに対し森山(1993)は、名詞述語文に対しては「違う」、形容詞述語文に対しては「そんなことはない」が用いられる場合が多いことを認めた上で、「違う」と「そんなことはない」の違いは、品詞の違いよりはむしろ、[A=(B以外のもの)]という項の不一致関係を表すか、属性認定などの判断に対する不同意を表すかの違いと見るべきである、と述べている。例えば、次の(6)で「違う」は、「この本」が「君の本」であるという、主語と述語の二項の不一致を表すのに対し、(7)で「そんなことはない」は、「この箱=重い」という相手の判断に対する不同意を表す²。

(6)a 「この本は君の本ですか。」

b 「いや、違います。」(6)(7)森山1993より)

(7)a 「この箱は重いよ。」

b 「いや、そんなことはないよ。」

一般に名詞述語文は、主語名詞が述語名詞に一致するという関係にあるため項同士の一致・該当関係を表し、否定の応答として「違う」が用いられる。また形容詞述語文は、ある属性が認定可能であるという判断を表し、否定の応答として「そんなことはない」が用いられる。ただし品詞との相関は絶対的なものではなく、先行する文が名詞述語文であっても「違う」が用いられなかったり、また「そんなことはない」が用いられたりすることがある。例えば、「彼女は美人だ」は名詞述語文でありながら、「違う」という応答を用いることができない。

(8)a 「彼女は美人だ。」

b 「*いや、違う。」(森山1993より)

(8)のような例について森山(1993)は、「「彼女は美人だ」といった場合は、「彼女は美しい」に連続するものとして、属性判断としての解釈ができる」と述べている。

しかし、先行文が属性叙述的な解釈が可能でありながら、次例のように否定の応答として「違う」が用いられる場合もあり、先行文が属性叙述を行うかどうかで「違う」の可否を説明することはできないと考えられる。

(9)a 「その話は本当ですか。」

b 「いえ、違います。」

(10)a 「その雑誌は無料ですか。」

b 「いえ、違います。」

また、以下のように先行文が典型的な形容詞述語文であっても、「違う」が用いられる場合もあり、「違う」の使用条件は先行文の述語の性質によってのみ決まるものではない。

(11) 「本当に泳ぎうまいね」太郎は追いついて杉山美幸に言った。「違うの、水に馴れてるだけ。山本さんもうまいのね」(太郎)

(12)a 「群馬のそばは有名だ。」

b 「違うよ。うどんが有名なんだよ。」

(13) 永尾「だから謝るよ、関口があんななってるの放っとけなかったんだ」/リカ「みなさんお聞きになりましたでしょうか？放っとけなかった？その間放っとかれたリカリンの立場は!？」/永尾「好きだって」/リカ「あーっと、永尾完治二十四才、ついに白状しました、さとみちゃんが好きだ」/永尾「違う、リカのことってんの、関口はただの友達で——」(東京)

以上のことから、「違う」の使用条件については更に検討する必要があると思われる。本稿では、「違う」は不一致関係を表すものである、という森山(1993)の主張を認めた上で(ただし必ずしも項同士の不一致関係を表すとは限らない)、具体的に「違う」がどのような場合に不一致関係を表せるのかを考察し、「違う」の使用条件を明らかにすることを目的とする。なお本稿では、否定の応答付加表現に先行する文としては、形容詞述語文、名詞述語文のみを考察対象とし、動詞述語文、の

だ文については考察外とする。

1. 考 察

1. 1 程度の否定について

既に述べたように、「違う」は一般に、(14)のように名詞述語文に対する否定の応答として用いられ、先行文が「AはBだ」というとき[A=(B以外のもの)]という主語と述語の二項の不一致関係を表す。しかし、(15)のように先行文が名詞述語文であるにも関わらず、「違う」が許容されない場合がある。

(14)a 「彼女は学生だ。」

b 「いや、違う。」

(15)=(8)a 「彼女は美人だ。」

b 「*いや、違う。」

森山(1993)が述べるように、「彼女は美人だ」といった場合は、確かに属性判断としての解釈が可能である。しかし、先行文の述語が属性叙述的な解釈ができる名詞であれば全て、「違う」が許容されないというわけではなく、先に述べたように「本当」のような名詞は「美人」などと同様、属性叙述的な解釈ができるが、否定の応答として「違う」を用いることは可能である³。

(16)=(9)a 「その話は本当ですか。」

b 「いえ、違います。」

従って、「違う」が用いられるかどうかは、先行文が属性叙述を行うかどうかに関わりなく決まるといえる。では、どのような場合に「違う」が用いられるのか。

否定の応答として「違う」が許容されない先行文の述語名詞としては、「美人」の他に「物知り、照れ屋、勉強家、好青年、長生き、薄味、ご馳走、重荷」などが挙げられる⁴。

一方、属性叙述的な解釈が可能でありながら、「違う」が用いられる先行文の述語名詞としては、「本当」の他に「嘘、無料、有料、病気、新品、裸、空、無罪、無一文」などが挙げられる。「美人」などの名詞と、「無料」などの名詞は、共に属性叙述的な用法を持つという点では共通しているものの、両者を比較してみると、「美人」などの名詞はすべて、程度副詞による修飾が可能であり、これらは程度性を持つ名詞であることがわかる⁵。

(17) 非常に {物知り/照れ屋/勉強家/好青年/長生き/薄味/ご馳走/重荷} だ。

*非常に {本当/嘘/無料/有料/病気/新品/裸/空/無罪/無一文} だ。

先行文の述語が程度性を持つ語の場合それを否定すると、通常、程度を否定することになる。例えば、

(18) 女は強い。

を否定すると、「女は強くない」こと、すなわち「弱い—強い」という連続的なスケールを持つ「強さ」という尺度において、その程度が高くない範囲であることを表す。しかし「違う」は、二者択一的に一致・不一致を問題にする表現であるため、連続的なスケールを持つ程度の否定には用いることができない。

ただし、以下のような場合には程度を否定しているのではないため、「違う」が可能になる。

(19)a 「女は強いね。」

b 「違うよ。強いんじゃないくて、強がりなだけだよ。」

(19)でbの話者は、「強い」か「弱い」かという「強さ」を問題にしているのではなく、「強がり」という全く異なる尺度により「女」の性質を述べており、いわばメタ言語的に「強い」というより「強

がりだ」と言う方が適切であることを表しているといえる。従って、次のように、「強い」という程度を否定する場合には、やはり「違う」は用いられない。

(20) a 「女は強いね。」

b * 「違うよ。強いんじゃないくて、弱いんだよ。」

次の(21)(22)も(19)と同様に、先行文の述語が程度性を持つ語であるが、程度を否定するのではないため、「違う」が用いられる例である。

(21) a 「彼はお金持ちだね。」

b 「違うよ。お金持ちじゃなくて、見栄っ張りなんだよ。」

(22) = (10) 「本当に泳ぎうまいね」太郎は追いついて杉山美幸に言った。「違うの、水に馴れてるだけ。山本さんもうまいのね」

以上のように、「違う」は二者択一的に一致・不一致を問題にする表現であるため、先行文の述語が連続的なスケールを想定できる程度性を持つ語である場合には、通常用いられない。ただし、程度を否定するのではなく、異なる尺度で測られる属性であることを述べる場合には可能になると言える。

1. 2 先行文の述語以外の名詞を否定する場合

また、以下のような例においても、先行文の述語が程度性を持つ語であるにもかかわらず「違う」が用いられる。

(23) a 「シマリスは値段が高い。」

b 「違うよ。エゾリスが高いんだよ。」

(24) (何人かで合唱しているのを見て) a 「田中君は歌がうまいね。」

b 「いや、違うよ。山田君がうまいんだよ。」

(25) = (26) a 「群馬のそばは有名だ。」

b 「いや、違うよ。うどんが有名なんだよ。」

「違う」は通常 $[A = (B \text{ 以外のもの})]$ という項の不一致関係を表すが、上の(23)~(25)では逆に、 $[B = (A \text{ 以外のもの})]$ という関係を表している。例えば、(23)で「違う」は、「値段が高い」のは「シマリス」ではなく、「シマリス」以外のものであることを述べ、また(24)では「歌がうまい」のは「田中君」以外であることを述べている。このように、先行文に含まれる述語以外の名詞を否定する場合も不一致関係を表すということにかわりはないため、「違う」は可能になる。

ただし、先行文に含まれる述語以外の名詞を否定する場合に、常に「違う」が許容されるというわけではない。

(26) a 「シマリスってかわいいね。」

b 「??違うよ。エゾリスがかわいいんだよ。」

(27) a 「田中君って素敵だね。」

b 「??違うよ。山田君が素敵なんだよ。」

(28) a 「そばっておいしいね。」

b 「??いや、違うよ。うどんの方がおいしいよ。」

(26)~(28)で「違う」は、 $[A = (B \text{ 以外のもの})]$ という関係はもちろん、 $[B = (A \text{ 以外のもの})]$ という関係を表すこともできない。例えば(26) b で $[B = (A \text{ 以外のもの})]$ という関係を表すすると、 $[「かわいい」 \text{ のは } 「シマリス」 \text{ 以外である}]$ ということ、つまり「シマリス」が「かわいい」というのは誤りで、「かわいい」のは他のものである、ということ述べることになる。しかし、「シマリス」が「かわいい」というのは個人的な評価に過ぎず、このような評価について聞き手が正誤判

断を下すということは通常できない。このため(26)～(28)では「違う」は用いられない。

以上のように、先行文の述語が程度性を持つ語であっても、述語以外の名詞を否定する場合には否定の応答として「違う」が用いられる。ただし、聞き手の個人的な評価を否定する場合には、やはり「違う」は用いられないといえる。

1. 3 聞き手の認識をすべて否定する場合

更に、以下のような場合にも、先行文が程度性を持つ語であっても「違う」が用いられる。

- (29) [正木家・居間(夕方)] 時計の針が五時三十分を指している。／美紀、受話器を置く。／不安
 そうな君子と、気が気ではない一也。／君子「のり子ちゃんとこで遊んでるって!」／美紀「(首
 を横に振り) …今日ね、学校休んだんだって…」／君子「なら、どうしてここへ、確認の連絡が
 怠慢だよ、学校は!」／美紀「違うの! 連絡先がカズ兄ィの家と会社にしてあって……どちらに
 も居なかったからって……」(宇宙)

ここで「違う」によって問題にされているのは、単純に $[A=B]$ か $[A \neq B]$ かという、先行文における項の一致・不一致の関係ではない。(29)で「違う」は、相手が誤解に基づいて認識している事柄すべてを否定しているといえる。このように項同士の不一致関係を表すのではない場合にも、「相手の認識」と「事実」が一致しないことを表すと考えられるため、「違う」が用いられる。

以下の(30)～(32)も同様に、先行する聞き手の認識すべてを否定し、誤解を解くために「違う」が用いられている例である。

- (30) 鴨井「い、いや。わしはそないな意味で言うてるんやないんや。カンバックなんて、無茶苦茶すぎる言うてんのや。英志、それがどないなことか分ってんのか! もう一度わざわざ、地雷の中に足踏み入れるようなもんや」／英志「例えが古いですなあ…地雷なんか避けりゃしまいですやん」／鴨井「下向きながら、ボクシングは出来ん」／貴子「違うんや、お父ちゃん。こいつなんかな、吹っ飛ばされたらええや! 私は、こいつの無神経さが気に入らん言うてるの!」(どついたる)
- (31) 永井「だから、ソノコ君につきまとうな…」／カオル「わかった!」／永井「あ、わかった?」／カオル「違う! 俺がわかったのは、お前らがつき合ってる事だ」(バタアシ)
- (32) 岩風呂・大浴場／英樹入る。モウモウと湯気に霞んだ湯舟の淵に、裸で座っている信と、湯の中に漬かっている名美が見えて来る。英樹に気付く二人。ザバツと音がして、湯気に霞んだ名美の白い裸が、岩陰に隠れる。突っ立つ英樹、茫然として見上げる信。英樹「平野! 貴様! 何してた? うちの奴と何してた!!」／見上げるだけの信。名美の隠れたあたりにザバザバと進む英樹。それを追う、信。／信「違うんだ、社長! 奥さんが入ってるとは知らずに、俺が!」(死んでも)

以上のように、先行文のタイプに関わらず相手の誤解に基づく認識すべてを否定する場合には、「相手の認識」と「事実」との不一致関係を表すため「違う」が用いられるといえる。

2. おわりに

以上、否定応答としての「違う」の使用条件について考察した。「違う」は二者択一的に一致・不一致を問題にする表現であるため、連続的なスケールを持つ程度の否定には用いられない。しかし、先行文の述語が程度性を持つ語であっても、程度を否定するのではなく、異なる尺度で測られる属性であることを表したり、先行文の述語以外の名詞を否定したり(聞き手の個人的な評価を否定する場合を除く)、また聞き手の認識をすべて否定したりする場合には「違う」が可能になる。このよ

うに否定応答としての「違う」の可否は、先行する文のタイプ（名詞述語文であるかどうかや、属性叙述文であるかどうかなど）によってではなく、不一致関係を表すかどうかによって決まるといえる。

注

- 1: Martin (1975) 参照。
- 2: ただし、「違う」と「そんなことはない」の使用は相補的なものではなく、「違う」も「そんなことはない」も共に可能な場合もある。「そんなことはない」は程度性（後述）に関係なく、相手が示した事柄に対して不同意という主観的判断を表す。従って、通常は属性判断を表す文に対して用いられるが、以下のような名詞文であっても、主観的な判断を加える余地がある場合には「そんなことはない」が用いられる。
 - a (ポロポロに引き裂かれて原形をとどめていない本について)「この本は君の本ですか。」
 - b 「いえ、そんなことはないと思います。」
- 3: 森山自身、「病気」のような名詞は、否定の応答として「違う」を用いることは可能であることを指摘している。
- 4: 属性叙述を行う場合に限る。
- 5: ただし、先行文の述語が程度性を持つ語であっても、マイナス評価の意味を持つ属性を否定する場合には、強い否定として「違う」がいいややすくなるようである（森山(1993)では「違う」は否定の強さにも関わることが指摘されている）。
 - a 「彼は怠け者だ。」
 - b 「いや、違う。」
- 6: ただし、「A以外のもの」とは何であるのかが具体的になければ「違う」は用いられない。

参考文献

- 大島資生 (1995)「応答句『そうです』の機能について」『日本語研究』第15号 東京都立大学国語学研究室
- 工藤 浩 (1983)「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』明治書院
- 佐野由紀子 (1997)「程度副詞の名詞修飾について」『大阪大学日本学報』16
- (1999)「程度副詞との共起関係による状態性述語の分類」『大阪大学現代日本語研究』第6号
- 寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- (1968)「日本語名詞の下位分類」『日本語教育』12号
- 西尾寅弥 (1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版 国立国語研究所
- 森山卓郎 (1993)「否定の応答付加表現をめぐって」『日本語教育』81号
- Martin S. (1975) “Japanese Reference Grammar” Yale Univ.

用例出典

(太郎) 曾野綾子『太郎物語』/ (黒い) 井伏鱒二『黒い雨』/ (宇宙)『宇宙の法則』 旭井寧・井筒和幸/(東京) 坂本祐二脚本『TV 版シナリオ集東京ラブストーリー』/ (死んでも) 石井隆『死んでもいい』/ (どついたる) 阪本順治『どついたるねん』/ (バタアシ) 松岡錠司『バタアシ金魚』